



こちらのQRコードから
中部教育事務所 HP にアクセ
スすると、これまでの他教
科を含む授業づくり講座の
記録がご覧いただけます！




授業者 高橋 由衣教諭 **単元** 第1学年「ずをつかってかんがえよう」

本単元末で期待する子供の姿

- 図に表現することにより問題文に示されていない数値を視覚化できることや、図が立式の根拠となることに気づき、図に表すことのよさを感じている姿。

本時の指導の手立て

- 今までは問題文に示された数をたすか、ひくかで答えが求められたが、問題文にある数では解決できないことに気付かせ、図に表して考える必然性を高める場面を設定する。
- 問題場面を図に表すことで、問題文にはないAさんの数を加えなければならないことに気付かせ、数値を補って(+1を明確にして)立式できるようにする。



提案授業のポイント

場面を図に表して問題の構造を捉え、問題場面を立式する。

授業観察の視点

視点1 児童の主体的な活動に結びつく「数学的な問い」を設定することができるか。


視点2 児童主体の対話的な授業が展開され、児童の思考が深まるような場となっているか。

高知県学力向上総括専門官 齊藤 一弥 先生による指導・助言

1 単元構成を見直す

〈I〉子供にとって最善の単元構成になっているか

単元の教材の配列が子供にとって最善かどうかを見直すことが重要である。この単元では、1年生での加法・減法のうち、順序数を含む加減法、異種のものの数量を含む加減法、求大(大小二つの数量の差と小さい方の数量が分かっており、大きい方の数量を求める場合)、求小(大小二つの数量の差と大きい方の数量が分かっており、小さい方の数量を求める場合)を扱う。どの場合も同じ加法や減法が適用される場として判断できるようにすることが大切である。そのために、学習内容や図での表現方法、子どもの発達段階などを踏まえ、最善な単元構成となっているかを考える必要がある。



2 答えが出てから算数の授業は始まる

〈II〉演算決定のための手段としての図

この単元において、多くの場合は、問題場面を図にかいてから式を考える。本単元の終末である本時では、式をかき、その理由を図を用いて説明することを学習する。初めに、列に並んだ子供が8人いるという結果を全員で確認する。それから、「8人になるということがたし算の式で表すことができるか」と問う。Aさんをどう見るかによって、子供からはそれぞれ異なる式が表現されるであろう。その根拠を図を用いて説明し合わせるなかで、基数(集合数)と序数(順序数)の理解を確かなものにしながら、式によって8人ということが表現できたということを大切にしたい。

